

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

弊社理事 石井正文(元駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第81回:ちょっと怖いお話;「サボタージュ(破壊行為)を知っていますか？」

2024年10月10日配信

- 日本では、サボタージュという言葉は余り聞かない。サボタージュとは、大学を「サボる」の語源であり、元々はフランス語で、労働争議の一形態(意図的に効率を落として働くことで、会社に損害をかける形で抗議の意を表すもの)である。
- 一方、日本ではあまり報じられていないが、最近欧州では、ウクライナ戦争を背景に、ロシアによるサボタージュ事件(水源に毒を入れるなど、一般大衆に幅広く損害を与えることを意図した、一種のテロ行為)が頻発している。
- 元々、ロシア(又はソ連)は、欧州でサボタージュ行為を行ってきた実績がある。
 - ・2006年11月;いわゆるリトビネンコ事件
 - * FSBとKGBの元職員のリトビネンコが、亡命先のロンドンで、おそらく元KGBの同僚と食事をした際に放射性物質のポロニウム210を盛られ、約3週間後の11月23日に急性放射線症候群で死亡。
 - * 英国側の捜査で、ロシア諜報員2名の関与が疑われは、指名が公表された。
 - ・2014年10月16日;チェコ南部ヴルベティツェの森で弾薬庫が爆発。2名が死亡。
 - * チェコ側は捜査でロシア連邦軍参謀本部情報総局(GRU)の特殊工作部隊「29155」が関与したとの結果を発表。
 - * それに伴い、ロシアの外交官18人を、情報機関の工作人員だとして国外追放。
ロシア側も20名のチェコ外交官を追放。
 - ・2018年3月;英南部ソールズベリーでロシアの元スパイ、セルゲイ・スクリパリ氏(66)と娘のユリアさん(33)が有毒の神経剤「ノビチョク」で毒殺未遂
 - * 2名のロシア諜報部員の関与が浮上し、名前が公表された。
 - * この2名は、上記のチェコの爆破事件でも関与が疑われている。



- 英国は、007の故郷であり、スパイ小説も多く、対外諜報活動はMI6(007の所属機関)、国内諜報はMI5(大ヒットしたBBCのドラマ「スプークス」の題材)が活動し、他国からスパイを含む亡命者を受け入れることも多いので、ロシアからのサボタージュの標的とされてきた。
 - ・上記の毒殺事件で犯人として浮上した2名のロシア諜報部員は、既に英国出国後で、そもそもロシア側がその存在を確認しなかったが、名前と写真を公表することで、今後のサボタージュ活動が出来なくすると言う意味があった。

- 一方、最近のロシアによるサボタージュ事件は、ウクライナ戦争との関係で、NATO基地や主要支援国であるドイツに向けられている。
 - ・2024年8月22日;独のNATO基地ガイレンキルヘン基地で、サボタージュ情報に基づき基地関係者が全員基地外に退避(翌日帰還)。
 - * この基地では、AWACSIによるNATOの早期警戒活動が行われ、ウクライナにも情報提供
 - * 8月一人の人物の同基地侵入を阻止した事件に次ぐ二回目(両者は無関係という)。
 - ・同じく8月に近隣のコロンバーンの別の基地で侵入者がフェンスを破り基地の水源に近付くために侵入した事件あり。
 - ・8月中旬;メーシャーリツヒの独軍事基地近くの住民1万人は水源周辺のフェンスに穴が見つかったことを受け、ボトル以外の水を飲まないよう警告された
 - * 当局は最終的に水源が汚染されていないことを確認

- 注意すべきは、日本も、ロシアのサボタージュ活動の対象になり得ること。
 - ・対ウクライナ支援では、日本もロシアから「敵対国」の烙印を押されている。
 - ・これまでの日本の「強み」の一つは、人種が違うこと(ロシア人の諜報員が紛れ込みにくいこと)だったが、最近はインバウンドも増えている(ロシア人観光客の第三国(タイ等)経由の日本旅行は増えているらしい。)
 - ・実際に手を下すのはロシア人であるとは限らない。

- 日本の警察は、破壊活動に関するインテリジェンス情報に十分網を張り、対象となり得る重要施設(水源のみならず、原子力施設、米軍基地など、多数の可能性があろう)への警備を強化する必要があるし、実際していると思われる。

以上

りそな総合研究所 理事 石井正文

